



1994 年(平成 6 年)
4 月号 (No. 587)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

若者に魅力のある日本山岳会にするために……………	1
追悼・白い世界に生きた岩下さん……………	2
海外の山……………	3
東西南北	
アルプスの自然を守れ……………	4
「四松庵」山の会での寄せ書き……………	4
山と自然の断章(8)……………	5
富士山が見える二番目の遠隔地……………	6
自然保護随想にひと言……………	7
ウエストンの明神岳への視線……………	7
報告	
全国事務局担当者会議……………	8
「火山を読む」講演会を聴講……………	8
三水会 2 月現地集会……………	9
図書紹介……………	12
『日本 300 名山ガイド 東日本編』	
『山ことば辞典』『京都ふるさと 50 選』	
『琵琶湖周辺の山』『中央本線各駅登山』『東海山岳・6 号』	
支部だより(山梨)……………	12
自然保護随想……………	12
書籍・雑誌受入報告/新入会員/住所・住居表示変更……………	13
会務報告/ルーム日誌……………	14
インフォメーション……………	15

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10 時～20 時
水、金曜 13 時～20 時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13 時～20 時

若者に魅力のある日本山岳会にするために

——青年登山懇談会・パネルディスカッション——

去る二月二十六、二十七日に、日本

山岳会主催(青年懇談会・学生部、企画・実行)の「青年登山懇談会・パネルディスカッション」が、八王子市郊外の大学セミナーハウスで、全国の会員一四名を集めて開催された。

この懇談会は、過去二年にわたって開催してきた「中高年登山対策全国大会」が、一応の成果を収めたものとして、会員の平均年齢が五四・八歳にも達している日本山岳会の現状を踏まえながら、若い人たちにも「夢と希望」のもてる JAC にしたいという願いをこめて開催したものである。

■基調講演は「JAC に望むこと」

懇談会は二十六日、午後一時三十分、坂本正智総務委員の司会により開催された。

まず、「青登懇」幹事の宇田川芳伸会員の開会の辞に始まり、藤平会長からおよそ次ぎのような挨拶があった。「中高年の問題は一応軌道に乗ったものとして、今回は私が昨年会長に就任したとき提案した七つの課題の一つとして、青少年対策、若者の登山離れをいかにして食い止めるか、について忌憚のない活発な意見を交わされ、新しい方向を見いだしていただきたい」。

次いで藤井正彦総務委員による「趣

旨説明」と学生指導委員会の相馬勉会

員による「アンケート調査報告」があ

り、学生指導委員会の山本宗彦担当理

事による「いまの日本山岳会に望むこ

と」と題する基調講演が約五十分にな

たて行われた。概要は次ぎのとおり。

「ステータスシンボルにしたいとか、

入会の動機は人によって様々だが、若

い人は、ただひたすら山に登りたいの

である。そのためには指導者がほしい、

仲間がほしい、さらに遭難対策も必要

なのだが、それらが JAC にはない。

またアンケートでも分かるように、J

AC は敷居が高く、何をやっているか

分からないので、入会の気持ちがか

ないというのが大多数である。したが

なからうか」

■パネリストは六名

約二十分の休憩の後、本日のメインである「若い人に魅力ある日本山岳会にするために」をテーマにパネルディスカッションが開始された。伊丹紹泰会員をコーディネーターに、熊崎和宏、片岡泰彦、松原尚之、神永幹雄、貫田宗男、山本宗彦の六会員をパネリストとして行われた。

まずパート1として、パネラーから「山との出会い」が話され、次いでパート2として①「大学山岳部の動向」熊崎会員 ②「学生部の現状と活動」松原会員 ③「日本山岳会の現状」片岡理事 ④「社会人山岳会の現状」神永会員(山と溪谷社副編集長) ⑤「未組織登山者の現状と傾向」貫田会員、以上からそれぞれ報告された。



6名のパネリストを中心に活発なディスカッションが……

大学山岳部や学生部の活動は余り活発でなく衰退気味だが、社会人山岳会には若い人も結構いる会が多く、全般的には昇り調子で落ちついてきている。また未組織登山者でも、講習会などで技術をマスターしエキスパートになった人もいることなどが報告された。

五分間休憩の後、パート3「日本山岳会の問題点」、パート4「若者に魅力のある日本山岳会にするためにはどうしたらよいか」について、伊丹コーディネーターの問題提起の形で六人の

パネリストが意見を交わしあった。

「高齢化は十年くらい対応が遅れている」「情報、人材、ボランティアなどJACには若者が求めるものもある」「二名の紹介、入会金などは入会の障害にはなっていない」「学生のみではなく未組織登山者に目を向け、講習会などを行いPRに努めるべきだ」「遭難対策」「若者が求めているものは技術、仲間、レスキューの三つだ」等々。

またJACの海外登山のあり方については「若者たちはいまのトップダウン方式よりボトムアップ方式の登山を望んでいる」「JACも背伸びする必要がある。全員が登頂する喜びを感じるような登山隊も出してほしい」など活発な意見が交わされた後、十八時三十分からパート5の出席者との質疑応答に入った。

質疑応答は主として支部からの出席者を対象に行われた。各支部とも高齢化の問題を抱えていること、競技登山の実態、会報「山」や「山岳」の重要性、マスコミの上手な利用、子どもとよからの教育の重要性、若い女性に人気のあるものにするにはどうすればよいかなど、テーマの性格上結論が出るわけではないが、それぞれ示唆に富んだ活発な意見が交わされ、六時間に及んだ懇談会は幕を閉じた。

十九時三十分からは会場を本館二階

の食堂に移し、懇親会が行われた。司会には坂本委員。藤平会長挨拶、中村副会長の乾杯の音頭と続き、雰囲気は一度に和気あいあいとなり、宴半ばパキスタンのナジール・サベール氏の紹介などがあり、二十一時、鳴原副会長の閉会の辞で一応中締めとなったが、二次会は宿舎の一室に集まり、延々と深夜まで続き、遠来の友との懇親を深めた。

■海外登山報告なども

懇談会二日目二十七日は午前九時より二班に分かれて開始された。まずパート1では中セミナー室で支部事務担当者会議、パート2では海外登山報告が昨日の大学セミナー館で行われた。

報告は「二人だけのチョモランマ」と題して貫田会員が行った。内容は一九九一年五月に行った二上純一会員との文字通り二人だけのチョモランマ登山の模様(二上会員は登頂直後遭難死)を裏話を交え、専門的説明を多数のスライドを駆使して行い、出席者の興味をそそった。

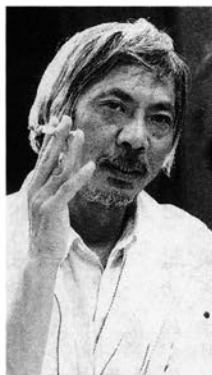
次いで①国内的には遭難対策も含めた実践的な登山集団をつくること ②海外遠征については尖鋭的な登山隊のほか、行きたい者が行ける全員登頂ができる、といった楽しめる計画も並立して欲しい、との総括を伊丹委員が行い、最後に小倉常務理事の閉会の辞に

よって、実り多い第一回の「青年登山懇談会」は全日程を盛会裡に終了した。

(写真・文 小倉 厚)

追悼 白い世界に生きた 岩下莞爾さん

江本嘉伸



彼は極地が好きだった

「入院」を知って、新宿の病院を訪ねたのは、九三年の初夏だったか、岩下さんはまだ元気で、私が手土産に持参した弁当を二人で食べながら、三時間以上も話し込んでしまった。モンゴル通いを続けている私が彼と会うのは久しぶりで、積もり積もった話と、独特の懐かしさで時間の過ぎるのを忘れていた。

寒い、白い所ばかり行きたがる人だった。二月、凍結したベーリング海峡横断のドキュメンタリー取材を前に、咳込みがひどくなり、念のため病院に行き、肺ガンと診断された。衝撃は大きかったと思うが、無論、治療で回

復できる、と信じていた。

「まさか自分に来るとはね……」とつぶやくように言い、「治つたら、仕事と関係のない、自分の旅を日本でのんびりしてみたいですね」と、あのしやがれ声で、しみじみもらした。

一九七五年に日本女性エベレスト隊に同行したのをはじめ、北極点、チョモランマ(八〇年)と、大きなエクスペディションに、岩下さんと行った。

同じ報道隊でもテレビと新聞は、チームの雰囲気が違う。「殿様」のように見える岩下さんに違和感を持ったこともあるが、それはドキュメンタリーにかける情熱と責任感、それに生来の育ちの良さからくるものだった。

岩下さんは、ヒマラヤに何度も出かけ、「エベレストのてっぺんにビデオを上げた男」としてもはやされたが、おそらく本人は極地での仕事のほうが好きだった、と思う。グリーンランド最北の村、シオラパルクを舞台にしたイヌイットの暮らしや、犬糞で踏破した「オールド・エスキモーの道」のドキュメンタリーなど、フィルム撮影の時代に作った記録映像には、独特の「岩下流」があった。

十二月十九日、逝く。五十八歳。別れは早過ぎはしたけれど、管理職を拒否し、わがままを貫いて、いい仕事を残した、という点で、幸せな人だった。

海外の山

メスナーの北極計画

江本嘉伸

ラインホルト・メスナーが、日本のアウトドア・ウエア会社とのブランド契約のために三月半ばに来日し、来年の北極点挑戦計画などについて語った。

八六年九月二十六日にマカルー、十月十六日に、ローツェを相次いで登り、史上初めてヒマラヤのジャイアント十四座を総なめにした人間となったメスナーは、当時「これで解放された。これからは何でもできる」と喜びを表現した。

十四座を達成する以前、メスナーは、ヨーロッパの著名なクライマーたちとの座談会で「ヒマラヤ登山に興味を失った」と明言したことがある。「八千メートル峰ハンター」など、いろいろな世間から言われることに嫌気していた時期だったのだろう。その時は、たとえばチベットを舞台にした新しい冒険を仄めかしていた。しかし、チベットの政治状況が許さなかったのか、持論の「ホワイト

・ウィルダネス」の世界に強くひかれたためか、十七年がかりの「十四座登頂」を終えてからは、行動の舞台はもっぱら極地が中心となっていた。

九〇年二月には仲間のA・フックスと二人、スキーをつけ、徒歩でロネ棚氷から南極点に到達し、二つめの極点を自分のものとした。

九三年四月には、弟のフーベルトとともにグリーンランドを南から北へやはりスキーをつけて歩き通し、三十五日がかりで縦断に成功している。植村直己をはじめ、多くの冒険者がグリーンランドの縦断に挑戦してきたが、徒歩・無補給というのは、メスナーたちが初めてで、次のターゲット北極点に自信をつけたことだろう。

その北極だが、計画では、シベリアから北極海の氷上を歩いて北極点をめざし、さらにカナダ・エルズミア島のコロンビア岬まで横断する。

途中、補給はいっさい受けず、食料、燃料などは南極、グリーンランドでやったように橇をひいて運ぶという。その頂きが「第三の極地」と呼ばれたせいだろう、世界最高峰に登った登山家が、南北の極点を目指すケ

ースは多い。初登頂者のエドモンド・ヒラリーは南極横断をやっているし、日本人初登頂者だった植村直己は北極点へ犬ぞりで到達したあと、南極をめざしていた。雪崩事故でナムチャバルワから帰らなかった大西宏も、エベレスト、北極点に次ぐ、南極点行きを目前にしなげらの挫折だった。

全ての八千メートル峰を登り切ったメスナーのような人間にしても、一度は、極地を通過してみたくなるのだろうか。「自分の可能性を試し、残された極点をめざす」と、記者会見では北極行の動機を語っている。北極点を取り巻く政治環境は大きく変わってきており、そこでの行動はやりやすくなっている。ソ連崩壊以後、シベリアからの北極行には、ロシアの極地冒険家たちが組織する冒険クラブがサポート業を開始し、今年も日本人はじめ冒険家たちの果敢な挑戦が続いている。

四十九歳になったメスナーの強靱な肉体と精神力には脱帽するが、三極点の「定食コース」には、今更、という気がしないでもない。小さくともメスナーだからこそ実現できる世界は他にもある気がする。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



アルプスの自然を守れ

遠藤泰孝

「去る二月二十日の国民投票でアルプスの自然保護を目指し、外国トラックの通り抜け通行を十年以内に全面禁止する提案を承認した」と報じられた。スイスでのことである。その代替え措置として、近隣諸国間のトラック貨物は、例えばドイツからイタリアへ運ぶ場合、スイス国境で列車に積み替えなければならぬという。ECによる市場統合が実現したにもかかわらず、スイスは孤立の道を選択したが、これがスイス周辺諸国へ投げかける影響は計り知れないものがある。

小生は一昨年の夏、スイスアルプス・トレッキングに行った。ツェルマットの手前でバスから電車に乗り換えたが、街中は馬車と電気自動車が走り、ガソリン車は締め出されていた。会員諸君ご存知のとおり、グリーンデルワル

ト周辺にしても、そこから上への交通手段はほとんど電力利用によるものである。帰途、モンブラントンネルをフランス側からイタリア側へ抜けたとき、国境検問所はガラシとしていた。かつてはトラックの渋滞の名所であったという。まさに市場統合が肌で感じられたが、そのためにあちこちで輸送が急増したらしい。

また、昨夏はオーストリア、ドイツ周辺に出かけたが、ザルツブルグから真北のオ・ド国境でトラックの渋滞を体験した。そしてフィナーレは、シュバルツワルトへの往復をベンツに乗り、アウトバーンからワルト内のホッホシュトラッセに入って酸性霧や直接排ガスによる枯損を車中から見てきた。チエコ国境方面がよりひどいらしい。ドイツのアウトバーンも周辺各国からの通り抜け車に悩まされていて、近々トラック、バスの有料制に踏み切るとか。またドイツでは駐停車のたびごとにエンジン切るのが常識とか。

自然保護地区の設定、高山植物の保護措置が前世紀後半に始まったというスイス。小国で全体が国立公園のような観光立国であるから、人々の合意が得られやすい事情もあり、周辺諸国の反発を覚悟での苦渋の選択と思われる。上高地、立山・弥陀が原などの現状にかんがみ、わが国も電気自動車などのクリーンエネルギーの交通手段への切り換えが考慮されねばならないだろう。

「四松庵」山の会での寄せ書き

開発秀三

下の写真の実物は、ハガキ大のもです。明治四十三年一月十六日に、代々木の志賀重昂・矧川さんの別荘「四松庵」の山の会で作られた寄せ書きです。中央に、白井光太郎、右上から烏水生、花袋生、矧川重昂、辻本(満丸)柳田国男(いずれも敬称略)という署名とともに、サイン様のマーク(①、②、③、④、⑤)で五人の人が書いてるようです。

これは、「山」五七九号で報告した「ウエストンの動向を示す古い葉書」を発見された軽井沢の中島松樹さんが最近「ノミの市」で買い求められたものです。中島さんは左上部に、煙を吹

き上げる山と「崎」という署名の絵があることから、軽井沢にこれらの人々が集まって書かれたものだろうと推測しておられました。

複写コピーをいただいた私が、ある機会に近藤信行さんにお見せしたところ、即座に、この日付は「四松庵」の山の会で書かれたものだと言われ、後日、小島烏水全集第十二巻にある烏水の『四松庵』の山の会―山旅の人人の群像』という文章のコピーを送ってくださいました。この文章の中には、このような葉書に署名をする風景まで描写されていました。発見されたこのハガキ大の紙は、間違いなくこの会で



「四松庵」山の会での寄せ書きのコピー

書かれたものといえます。

ところで、上記の白井光次郎、小島烏水、田山花袋、志賀重昂、辻本満丸、柳田国男の名は、この文章の中にもその出席の事実が書かれていて確定的ですが、サイン様のマークについては、誰のものを特定するのはなかなか大変です。そこで、烏水の文章に書かれている人名を核として推測を試みましたが、最も容易なのは⑤の山の下に「崎」という字は山崎と読み取るのが自然でしょう。

しかし、これ以外は全く見当もつきません。まず、①は天下、②武田久吉という仮説を立ててみました。手当たり次第に関心を持っておられそうな方のご意見を聞きましたが、どなたからも賛同を得られませんでした。しかし一人の方から、①はK・Kとも読めるよ、というご意見がありました。花と山の絵が描かれていますので、画家でプロの天下藤次郎と丸山晚霞、それに古河銅山の木村鑑吉(廣畝)を主とし、植物学者の白井光太郎、武田久吉を従として候補に上げ、まず、天下、丸山両氏の画集を調べることから始めました。天下の画集では、T. OHSHITAと端正なローマ字で書かれたサインばかりですし、晚霞の画集は見つけることが困難でした。

壁に突き当たった状況の中で、国立近代美術館の学芸員の方々の知識を借りるというのを思いつきました。飛び込みで、田中さんという方にお目にかかって意見を聞きましたが、「T. OHSHITA」というサインしか気がつかないなあ」と言われながら、天下藤次郎が創刊した「みづゑ」という美術雑誌の合本したものを持ってきて来られました。田中さんが最初に見始められた明治四十二年刊第四十六号の第一ページにあった鶏の絵のサインが②にそっくりでした。そして目次には、丸山晚霞の絵であることが書かれていました。これは幸先がいいということで、私も明治四十三年刊第五十八号を見始めました。目次に、「三脚物語り」……汀鷗という字が目につきました。私は「天下藤次郎美術論集」(美術出版社刊)という本の中で「三脚物語」という題名を知っていましたから、「汀鷗」というのは天下藤次郎の筆名であるとすぐ判りました。

一方、傍らの田中さんがT・Oというサインのある絵を見つけてくださいました。「汀鷗」というのはT・Oからとった筆名というわけです。このような経過で、②は丸山晚霞の、③は天下藤次郎のサインと絵であると断定し、よいと思われまふ。そうすると、①は天下でなく、K・Kと読むのだろう

ということになり、木村廣畝が候補として上がってきました。田中さんから「②と③は洋画家の筆使いであるが、①は日本画風の筆使いだ」というご意見も出て、まだ決定的といえないまでも、確率の高い推測になるだろうと思われまふ。残るのは④ということになりますが、日本字崩しなのかローマ字なのかも全く見当が付きません。私の大胆な仮説では、ローマ字でS・Oか、S・Iで、前者は、天文台の小倉伸吉、後者は三枝威之介かと想像しています。皆さんのご教示をお待ちします。

「追記」1 木村廣畝の画集はアマとすることもあってみつきりません。2 後で気付きましたが、「天下藤次郎美術論集」の編集者は近藤信行さんでした。

山と自然の断章(八)

岡村治信

■登山の方式

登山史の黎明期には高山大岳の頂上を極めること、とくに人類未踏の高峰に登ることが非常な名誉とされ、初登頂を競うという風潮が強かった。いわゆる Peakhunting は日本語では征服的登山といわれる。その対局にあるものが Contemplative つまり静観的登

山である。単に頂上を極めることに捉らわれず、山と自然を愛し静かに味わうという態度である。

静観的登山のルーツはイギリスの有名な登山家ノーマン・コリー(Norman Collie)の考想に由来する。彼によれば「まことの登山者とは、徳(Virtue)という語で最も適当に表現し得る程度において、山に登ることを愛する者である。そして登山は単なる身体的運動ではなく、その一部は思索であり瞑想の境地でなければならぬ」。私もこの考え方に全面的に同感である。真の自然愛好心に裏づけられ、瞑想によって心身の健全と自己開発を目指すところに究極の登山方式があると考えたい。

ただし「静観的」よりは「観想的」登山といったほうがより実態に合うと思うがどうか。しかし今日わが国では「征服的登山」でも「観想的登山」でもない「行楽的登山」が最も一般的であることは否定することができない。

■野生の力

私が自然を愛し山に登るのは理論でも感情でもなく、むしろ私の内に潜む生得的、体質的な傾向であって、原始人の自然崇拜と同じようなものだと思ふ。およそ人間が山に登り、自然に親しむことによって幸福を味わい心身を

高揚させるのも、自然の象徴としての山の持つ理念と英知の働きがあればこそである。だから、そこに霊的なものを認めるか否かは別としても、結局登山行動そのものが、ニューギニアあたりの原始社会に見られるアミニズムとあい通ずるのである。これが山屋としての私の個人的体験から割り出した結論である。

これを人間の側から見れば、そのような自然の働きに感応するエネルギーの問題である。原始人たちはあらゆる自然の働きを全身に受け止め、敏感に反応する能力をそなえている。

このエネルギーこそ、人間存在の根本にある野生の力であると思う。我々は科学や経済が発達するにつれて「自然」と縁遠くなり、この貴重な野生の力を大量に失いつつあることを、もっと真剣に考え、そして憂慮しなければならぬ。

■山を恋する

冬も半ばを越して、輝きを増した陽ざしの中にふと春の気配を感じるようになる、もう春の山を思い、山歩きの志向が胸の中を占領する。春の気配といっても、まだ冬のさなかの風物の奥に淡い心象としてたゆとう「春」にすぎない。だから山にはまだ冷たく味気ない「冬」が停滞していて、灰色の索漠と単調しかないこともよくわかった。

ている。それでも、街中の雪が消えて散歩によい季節になると、どうしても一度山へ行ってみたくて心が落ち着かない。

春にはまだほど遠い低山は淋しい。そんな山径を、もう土に還ってしまつた落ち葉を踏んで歩くのも怪しい。でも、山も春を待ちながら、人の訪れをも首を長くして待っているだろう。人の目や耳を愉しみます何はなくとも、自然はいつも清く美しく純粹である。そのような自然に触れること自体が私を劇しく魅了する。これが「山を恋すること」なのだろうか。

富士山が見える 二番目の遠隔地

高島真一

私は昨夏、富士山を望める第二番目の遠地と信じていた大峰山脈八剣山頂から富士山を遠望するチャンスに恵まれ、これに気をよくして「八剣山から富士山を見る」と題し、会報十二月号(五八三号)に報告させていた。ところが去る二月五日、朝七時のNHK TV ニュースを何気なく見ていたところ、ニュースに続いて「富士山が見える所」と題するルポ番組が放映された。いい加減に聞き流していたところ、

〇〇山(山名を聴き落としてしまった)からの富士遠望写真なるものが放映され、その山から富士山までの距離が約二九三キロメートルと説明されているのに気がついた。私はこれを聴いて、いささか驚き慌ててその番組に注目したが、すでに終りに近くなっていた。

それは私が二番目と信じていた八剣山が富士山からおよそ二九一キロメートルくらいであることを五〇万分之一の地図から算出していたからで、二九三キロメートルの地点があるとなれば、八剣山は二番目ではなくなってしまうからである。私は早速NHKに電話をし、〇〇山の名を問い合わせたところ、そのときの対応者は「それはヒヤマといい福島県にあるが、詳細な場所や高さなどは分からない。福島県の観光課へでも問い合わせてみたら」といういささか心もとない返事であった。

そこでこの山名をコンサイス日本山名辞典で調べたところ、日山、別名天王山(一〇五八メートル、日本山岳標高一覧では一〇五七メートルとなっている)「……阿武隈山地の最高峰大滝根山の北に連なる尾根上に位置し、山頂に日山神社がある」とあった。これをまた五十万分之一の図で搜したら、福島市のほぼ南東、およそ三〇キロメートルのところにあった。次に同図で富士までの直線距離を算出したら、約二

九七キロメートル(図上で五九四ミリ)。この線上には富士に近いほうに奥多摩の山々があるくらいで、それ以外は際立った山らしい高地は見当たらず、この間約三分の一が東北本線の走る低地と重なるのも印象的であった。それから改めてまた八剣山からも測り直したら、約二八八キロメートル(図上で五七六ミリ)と算出できた(その時々という距離が違うのは図上での測定誤差であるのでお許し願いたい)。

というわけで、先に会報に報告させていただいた「富士山遠望地第二番目の八剣山」は撤回させていただき、今のところ二番目は日山に譲ることになった。訂正し、私の早トチリをお詫びする次第である。

なお私が八剣山を第二番目と思い込んだのは田代博氏著「山岳展望の楽しみ方」二四五ページ「富士可視マップ」図を見てのことで、参考までに第一番目の最望遠地は法師山(一一二〇メートル(熊野山地))で三三五キロメートル、さらに北東方面(日山とほぼ同方向)の最遠地は八溝山(二三三キロメートル)とも同書にある。

この調子だと、まだ私の知らない第一番目、第二番目が他にあるかもしれない。どなたかご存じの方はお教え願いたい。

「追記」右の訂正文を書き上げて送付

しホツとした直後、「岳人」三月号をみていたら「富士を望める限界の山を求めて」と題する石垣博史氏の一文が目につき、またまた新事実を知った。その内容は地形図からパソコンを使つてのシュミレーションにより富士山頂が見えると思われる山を確かめ、それを実地に確認しに行った話である。福島県二本松近くの日山、麓山、花塚山、熊野の大雲取山、妙法山、京都府宇治田原町の鷲峰山などが上げられていた。しかし実地で確認できたのは日山と麓山だけだったようで、日山については遠望写真も掲載されていた。また、法師山からは富士は見えないのではないだろうか、ともあった。

自然保護随想にひと言

笠井 篤

「山」二月号(No五八五)に掲載された自然保護随想は、なんとも陳腐な内容と言わざるを得ない。

大企業がかつてその廃棄物によって多くの一般住民の健康を害し、取り返すことのできない大規模な自然破壊をしたことを直視せず、その後の環境対策でもって免罪符としているような論調は時代錯誤もはなはだしい。

かつて公害の源であった大企業が現

在環境問題を重視し、その対策を講じるようになったのは、そのような方策を取らなければ企業そのものの存在が危うくなるからではないだろうか。さらに、環境問題そのものがビジネスになることを企業が見逃すはずがない。工場敷地周辺に公害に強いキョウチクトウを植え、緑化をアピールするのはもはや通用しない。

発展途上国への環境技術の指導は、それらの国の環境を破壊したのとはわが国の大企業ではなかったのか。その破壊した環境を環境保護指導と称して大企業が行う。マッチ・ポンプの構図と云うたら言い過ぎだろうか。つまり二月号の自然保護随想は、なりふりかまわぬ利潤追求の企業の論理であって、真の自然・環境保護とは言いがたい。「木を植える男」の話、NGOのボランティア活動、こういった目立たない地道な活動こそ、もっと高く評価すべきだと思う。

この随想を自然保護委員会はどのように受けとるであろうか。筆者を含め、登山者は自然破壊者であることを自覚すべきである。山小屋にあるという風呂(筆者は使用したことがない)で実際は知らない)の廃止、海外遠征登山でも、登頂後の装備、ゴミを総て持ち帰る、などを自然保護委員会で提案したらどうであろうか。三十数年

来、環境影響評価の研究に携わってきた者として、あえて苦言を呈した。

ウエストンの明神岳への視線

田畑 真一

大正二年八月七日、大木操は上高地の河童橋の近くで、ウエストン夫妻らに逢い、夫妻らの写真を撮影するという好機に恵まれた。大木は「清水屋の浴衣掛けのままで、河童橋付近まできたのである。実にこの時である。彼方から、当時日本に三度目の来朝中のウエストン夫妻が、上高地の主、上條嘉門治を連れてやってきたのに偶然出合ったのである」(『一高旅行部五十年』)と述べている。大木はまた「一高山岳会の仲間が帰京するので、それを見送りながら河童橋まできたところ、嘉門治を案内にして槍ヶ岳を目指すウエストン夫妻に出合った」(『一高旅行部の足あと』)とも述べている。以上、大木の記録には写真も添えられており、貴重なガラス乾板を日本山岳会が所蔵する。ところで、写真の中で、ウエストンは右横向きであり、何やら上方に視線を向けている。これに対し、夫人はやや右向きの正面に視線を向けている。私は夫妻が何を眺めているものかとの

課題を持った。そして撮影場所についても特定したいと考えた。

そこで平成五年十月三日、この検証を行った。その結果、写真の背景に写っているなだらかな山稜線は焼岳方面であることがまず判明。したがって撮影場所は五千尺ホテル(藤沢三千穂支配人)側であることも判明した。また、河童橋の向こう側、つまり梓川の右岸には、ケシヨウヤナギの大木も写っているが、これが八十年を経た現在も健在であり、しかも上部の枝振りが同様であることを確認、感動を覚えた。次にウエストンが右横向きであるという点である。私は原謙一氏(資料委員長)に対し、ウエストンと同じポーズを取っていただいた。この状況を私が眺めさせていただくという格好である。その結果、ウエストンは明神岳の方向を眺めていることが判明した。コンパスで調べると、河童橋から見て東北の方位である。なお、夫人はやや右向きの正面であるから、五千尺ホテル方向を眺めていることも判明した。私は以上の点を遠藤光男氏(資料委員)と山口俊輔氏(理事)にも確認していただいた。

「別記」先人のお名前を敬称略とさせていただきます。本文であげた記録についてご配慮いただいた中村純二先生(副会長)に対し、謝意を表します。

全国事務局担当者会議

九十周年行事などを検討

総務委員会

二月二十七日（青年登山懇談会の翌日）、八王子市の大学セミナーハウスで、平成五年度の全国事務局担当者会議が開催された。

司会では中川総務・集会担当理事。議題は、①日本山岳会創立九十周年記念行事の展望 ②平成六年度全国支部懇談会について ③青森支部設立記念山行および若葉会山行について ④ヒマラヤ・マカルー峰北面登攀 ⑤その他、の五つである。

①については中川理事、小倉常務理事が説明したが、その内容は九十周年記念行事としての案は記念行事の全国ブロック別式典、ヒマラヤ・マカルー峰北面の登攀、ルームの拡大、文章と映像による百年史の作成、百周年に向けてのデータ・バンク設置などである。ブロック別式典についてはそれぞれの支部持ち帰りとなり、次回までの課題

となった。

ヒマラヤ・マカルー峰北面登攀については渡辺雄二高所登山担当理事より説明がなされた。チベット側より北面東稜未踏のバイオニア的要素を持ったルートであること、隊員は十二名（他に医療、マネージャー・気象担当）程



熱心に論をかわす各支部の事務局担当者

度とすること、五月初旬実行委員会を設置することなどであり、隊員募集、募金などの協力が要請された。

全国支部懇談会については、本年の開催地である関西支部の三品武彦会員が場所（氷の山、期日は十月の予定と説明）。

青森支部設立記念山行および若葉会山行については、青森支部の中村勉会員が説明した。それによれば本年五月二十八日（土）～二十九日（日）の両日にわたって戸来岳（一五九メートル）と八甲田山（二五八五メートル）を舞台として行う予定である。

⑤のその他については主として支部からの質疑応答となったが、支部の除籍者の扱い、新しく作られた山岳会のシオリ、『東海山岳六号』のPR、支部運営、若者増加対策、教育の問題、自然保護などに議論が集中した。

（文・写真 小倉 厚）

「火山を読む」

講演会を聴講して

早川 滉

平成五年十一月十一日に、集会委員主催の自然景観の読み方シリーズ「火山を読む」講演会が開催された。

講師の金沢大学教授・守屋以智雄先生の紹介はシリーズ第一弾「山を読む」

の講師、明治大学教授・小崎尚先生（会員）がされた。お二人は東大の研究室で先輩、後輩の間柄とか。

テキストとして著書「火山を読む」（岩波書店）とプリントもあったが、スライドを用いての講演であった。二百を超す日本の火山のカタログ（リスト・発達史）作りは完成し、次は世界の火山について取り組んでおられるとのことである。

スライドはまず、一九八〇年のアメリカ・セントヘレンズ火山の大噴火をとらえたモータードライブの八コマであった。円錐形の山頂が一瞬にして、すっかりなくなってしまう大崩壊の様は圧巻というか、見事というべきか。アイスランドの火山は長い割れ目の美しい噴火であった。

次はハワイで、主な五つの島が北西から南東に並んでいて、南東のハワイ島の東の海の中にはホットスポット（火山を生じさせる熱い場所）があり、プレートテクトニクス理論によるプレート（地球表層の岩板）の移動によって、次々と島ができ、火山が古くなつてゆく、そんな火山のモデルであった。私が三年ほど前にハワイにいったときの空からの眺めや、ハワイ島のなかなか「環状火山」最高峰マウナ・ケア（四二六〇メートル）、盛んに活動しているキラウエア火山の見事に陥没

した円形のカルデラ、そしてまだ熱い溶岩流が道路を寸断していたり、溶岩による独特な黒砂の海岸など、当時現地ガイドが説明しなかった分の全てが、先生のお話でよく理解できた。

オアフ島の強風の名所や国立墓地も観光地の湾も火山地形であつたし、ワイキキのホテルからジョギングで頂上まで登ったダイヤモンドヘッドの典型的なクレーターも懐かしい。今頃になってやっとハワイの地形が修得できてうれしくなった。

日本の代表的火山のタイプは成層火山で、その第一期円錐形の代表として富士山、第四期まで経過した火山として赤城山の説明があつた。

第三期の火山としては北海道渡島駒ヶ岳が特に詳しく説明された。二十年ほど前に五年間朝な夕なに眺め、ファミリーで山スキー、はては岩登りと楽しんだこの山を円形の形や頂上岩峰部、火口原の割れ目など、特徴の全てを説明いただいた。

私にとっては一番親しみ深い火山をこんな風に教えていただき、非常に懐かしく感じた。思えば九州転勤の発令を受けてから登った駒ヶ岳が、私の火の国、九州の山への、そして日本の火山巡礼の出発点になっていたといえるだろう。

若い頃は富士山に代表される火山に

ついては、ガラガラだけで山の魅力に欠けるとして、登山の対象から外していたこともあつた。しかし、今回勉強して、改めて振り返ってみると、日本に火山がいかに多くあり、バラエティーに富んでいるかを、知らないままに登っていたことか。

講演は貴重な珍しい世界の火山や身近な日本の火山のスライドを豊富に使って行われ、まさにワールド・ワイドな先生の学問の一端を解りやすくお話しただき、たいへん楽しく勉強させていただいた。

これからはますます火山に親しみがわいて、山登りがより豊かになるにちがいないと確信した。

二月現地集會

雪の竹寺山行

三水会

二月十二日、東京は朝から大雪で大変だ。成田空港は閉鎖。太平洋沿岸は、伊豆方面から千葉の海岸にわたって、昼頃まで十センチ以上の大雪警報。

三水会の、三百回を記念する山行は、例年通り、竹寺に行くことになっている。坂倉さんから大雪でも決行すること。十三時三十分西武池袋駅に集合。しかし坂倉さんの姿が見えない。滝沢さんが残り、本隊は十三時四十八

分の準急で、雪の降りしきる中を出発する。

徐行運転で大幅に遅れ飯能に着く。飯能には甲府から参加の山村さんが待っていた。坂倉さんも合流、総員十名無事集合したので、西武タクシー三台で竹寺に向かって走る。雪は止まない。行けるところまでと頼み、中沢まで入ることができてホッとした。雪も小降りとなり、約四十分ほど歩いて竹寺に着く。

お寺では、甘酒をわかし、部屋も暖めてくれていた。甘酒に日本酒を割って一杯の味は、忘れることができない。十八時から、記念すべき三水会の会食に入る。住職の精進料理の講話も芽え、竹の筒から流れる薬湯を片手に味わう料理は雪を忘れさせ、また時を忘れさせた。そして食べ、飲む、会話で記念の会食は十分盛り上がった。二次会は、歌と俳句(連句)などで雪の夜を楽しむ。

十三日快晴。皆は元気に起床。薬湯つきの楽しい朝食をとる。記念撮影など行事を終了。九時四十分、雪の山路を子の権現に向かって出発。

雪が少し深くなったので、高田さん

がトップをつとめる。豆口峠からの、棒の折を中心とした山嶺は、雪に輝き実によい景色であった。皆の足どりも軽く、子の権現直下まで元気に歩く。ここで、用意した昼食をとることにした。

ラーメン、おでん、お酒などで楽しい昼食となる。

天龍寺で休憩を取る予定はなかったが、住職と坂倉さんの話が長くなり、だいふ時間が遅れた。下山道は山村さんが先頭に立ち、元気に歩く。無事赤い欄干の降魔橋に着き、小憩後アスファルトの車道を滑らないように吾野に向かった。

皆緊張が緩んだのか三三五五、吾野駅に向け歩く。早いグループと遅いグループでは、十分くらいの差がついた。雪の山路も、天龍寺までは一グループしかいなかったが、寺で待っている間に、かなりの登山者があつた。

吾野駅十四時九分、池袋行急行に私は、入院中のため先を急いだが、あとの九名は次の電車に乗り、飯能で最後の祭りをして解散したと思う。参加者は乾能尚以下十名。

(中 保)

今年もまたねんて会いましょう

図書紹介



市川静子・岡田敏夫・岡部紀正・
川越はじめ・廣澤和嘉共著

『日本300名山ガイド 東日本編』

本会選定の「日本三百名山」について、このたび新ハイキング社（選書第十五巻）より標記の本が出版された。百名山完登者の次のステップ・日本三百名山挑戦者にとっては、まことによい指針になるものである。

筆者は三百名山完登者の市川静子氏を中心とする標記の五氏。いずれも本会会員であり、かつ新ハイキング・ペンクラブの有力、錚々たるメンバーである。その執筆分担は岡田氏が東北を中心に54座、廣澤氏が関東甲信越、中部にかけての39座、以下岡部氏21座、市川氏20座、川越氏16座となっている。

内容は北は北海道の利尻岳から南ア農鳥岳までの一五〇座の最新情報によ

「図書紹介」の 原稿掲載について

- 日本山岳会で購入、あるいは寄贈されたルームにある本を紹介する。
 - 毎月の図書委員会のおりに、会報「図書紹介」委員で検討し、紹介する本を決める。
 - 紹介依頼者を決め原稿を依頼する。
 - ＊著者からの依頼で書いてくる方、自分でよいと思った本の紹介を書いてくる方などがありますが、委員会で依頼した方と原稿が重複することがあります。そうした場合、会報の「図書紹介」担当の細井が調整させていただいています。
 - ＊紹介スペースに限りがあり、原稿量は指定させていただいています。
- 以上のような手順で本の紹介をしておりますのでよろしくお願いします。
- ＊紹介されなかった寄贈本については受入れ報告という形をとらせていただきます。
- （細井澄子）

る完全ガイド。各山ごとに懇切かつ正確なコース説明とともに、必要な地図名、コースタイム、問い合わせ先、地図と写真、その上親切なことにコースの難易度が星のマークの数によって示されている。東日本編と銘打ってあるが、次回西日本編（三月発行予定）で少し東日本の山と思われるものが入るのは、数の区切り関係で仕方がないのだろう。早く名実ともに三百、西日本編をセットとして見たいものである。

一九九四年一月 新ハイキング社発行 A5判 三三〇ページ 一、六〇〇円
（小倉 厚）

岩科小一郎著／藤本一美編

『山ことば辞典』

日本人と山との結びつきは、登山という遊びが確立する以前から強いもの

があった。万葉集をひもといてみれば、山も野原も心の中に大きな比重を占めていることがよく分かる。そうして山との結びつきの中から生まれてきた言葉は、いま私たちの山登りの世界にも多数生き残っている。

この本はそうした世界を対象に「山岳語彙集」として発行されたものである。昭和十五年刊行の『山岳語彙』をもとに再編集して復刊されたわけで大変ありがたい。かつて故今西錦司氏がどこかで「山に登るのならば、柳田国男の『山の人生』ぐらいは読んでおくべきだ」と記しているのを読んだことがある。岩科氏のこの本は、そうした世界とも通じる貴重な山ことばの集

成。
クラ、ケナシ、ゴテン、マタ、マド、ヤト、ムレ……などは割合知られているが、読んでみると山歩きの楽

しさがまた何倍かにふくれあがる。大島亮吉の雪崩の方言調査なども紹介されていて、先人たちの豊かで幅広い山の味わい方を教えられる。

見返しにある編者・藤本一美氏による「山岳地形語彙換式図」が理解の助けになり、楽しい。

一九九三年一月 白水社発行 発売・星雲社 B6判 一九四ページ 一、六〇〇円
（大森久雄）

京都山友会編

『京都ふるさと50選』

北は丹後半島から南は奈良県境まで、京都府下の無名の山・隠れた山を中心に、ヤブ山五十山を紹介したガイドブックである。例えば京都北山では、三ヶ谷山・奥ノ谷山・中ノ谷山・天狗畑・地藏杉・ムシンボなど従来のガイドブックにはない難コースの山がずらりと並ぶ。

要するに本書は手とり足とりガイドする通常のガイドブックとは一味違ったところがあり、自分で山を選び、自分でルートを探し出し、山行の全てを企画できる力量のあるベテラン向きのガイドブックといえよう。

本書には対象となる山城を各山ごとに三次元的に表した鳥瞰図が描かれており、事前の検討に役立つ。また巻末

には五〇〇メートル以上の山二三〇山について山名・標高・三角点独標の別・地形図の名称などが一覧表の形で示され、読者の便宜を図っている。

一九九三年八月 京都新聞社発行
B 6判 二〇〇ページ 一、二〇〇円

長宗清可著

(若林忠男)

『琵琶湖周辺の山』

生命の水がめ、美しい琵琶湖が見たい！の思いが、十二年、琵琶湖をとりまく山々となり、百回につながった。

一九八一〜九三年。所属する登山会のリーダーとして読図を中心に、ぶっつけ本番、日帰り山行、公共交通機関を最大限利用等の視点で山、コースを選んだ。同行者も増え、仲間の延べ参加者一、二二名、延べ距離一、五六六キロメートル。高さや奥深さ、有名でない山々だが、人が入らないだけ、あ

りのままの自然が残されていた。しかし、当然ながらまた、破壊も多く目にした。副題に「うり坊」とある。うり坊とはイノシシの子供のことで、未熟な自己の山行をなぞらえたものとあるが、人を連れての百山は立派なものである。略図や写真などは少ないが、里山の素朴な自然が季節感と仲間の温かさを秘めて綴られている。素直な感性の記録である。

一九九四年四月 ナカニシヤ出版発行 二六八ページ 二、二〇〇円

(林 辰夫)

山村正光著

『中央本線各駅登山』

「中央本線には有名無名、それぞれ個性豊かな山が多い。地図の中から、それらの頂を探し、古書を紐解き、山名やコースを調べ……カモシカにできない山登り、創造的な山行ができた……」と、著者が前書きで述べているように、中央線の高尾から松本までの四十六駅よりの登山ガイド。

ベストセラーとなった『車窓の山旅』で知られる著者(本会会員)が、猿橋からの馬立山、甲斐大和(旧初鹿野)からは徳並山、山梨市では八幡山などあまり馴染みのない山を紹介している。また、著者の考証の広さによる地誌、故事、山名の由来などのカコミによって山歩きを楽しむに十分に味わてくれる。

一九九四年一月 山と溪谷社発行
一七六ページ 一、六〇〇円

(大橋 晋)

日本山岳会東海支部編

『東海山岳 六号』

一九八四年から一九九二年の八年間

にわたる東海支部の報告書である。

ヒマラヤ未踏ルートへのビッグな記録として「ガウリシャンカール峰東南稜初登」、四度の遠征でやっと登頂に成功した「天山・雪蓮峰初登頂」を巻頭に掲げている。

一九八〇年の東海支部創立二十周年記念にロールワリン谷に橋の架設援助を行い、ガウリシャンカール峰を目指した。南峰直下に達しながら、冬の季節風が吹き荒れ、断念。その再挑戦が一九八四年になされ、技術的に最も困難とされている東南稜の核心部を突破して、登頂に成功した。

明治四十四年に大谷探検隊によって撮影された「夕映えに立つ天山雪蓮峰」に魅せられ、登山記録や地図もない雪蓮峰に手探りのままキャラバン隊は出発した。未解放地区もあって入山まで紆余曲折。険しい山道で駄馬の墜落事故などが続き、辛苦をなめた苦しい経験の蓄積で頂上に達し得た。

その他、ヤン峰、シシヤパンマ峰、ガングスタン峰、アイランドピークと東海支部では毎年のようにエネルギーに遠征隊を送り、その登頂報告がなされている。

湯浅支部長が序文で、尾上前支部長の名句「海外登山こそ東海支部創始のころ」を引用し讃えているが、『山岳』七四年(一九七九年)の中世古隆

司氏の「東海支部の二十年」を併読するとよく理解でき、歴代支部役員の苦労が伺い知れる。

個人山行の記録として、ペルーアンデスのワスカラン峰、カナディアンロッキーのアシニボイン峰・ロブソン峰、モンゴルのアルタイ山脈など多岐にわたり、さらに海外登山の紀行・随想欄を設け、多くの方が執筆している。

研究欄では、石岡繁雄氏の「ナイロザイル事件」の論考が多く、ページを割き、改めて事件の解明とザイルの危険度を知らされる。また中高年者の高所登山について、トレニング、山岳遭難の実態など四氏が現在の問題点をあげている。

国内登山の記録には「針之岩洋上登攀」と「笠ヶ岳東面穴毛谷第一尾根」があり、紀行・随想欄には特集として「いでゆの山旅」が組まれ、全国の山間辺鄙な温泉と、そこから登るひっそりとした山を分担執筆している。

巻末には年表を付し、委員会を中心とした活発な活動状況がよくわかる。このような重厚な報告書を作り上げている会員層の厚さと、編集者の意気込みが伝わってくる。

一九九四年二月 A五判 四〇五ページ 三、〇〇〇円(送料別)申し込み先 〒443愛知県蒲郡市竹谷町内山六八一六 鈴木常夫(高澤光雄)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

山梨支部

木暮翁碑前懇親会の 報告とお知らせ

■第三十一回木暮理太郎翁碑前懇親会
を、一九九三年五月二十二・二十三日
にかけて、山梨県須玉町金山平で行っ
た。夕刻から雨となったので、有井館
にて懇親会から始める。今回は、本部
から山田会長を始め、松田副会長、小
倉常務理事が出席された。

恒例の堀内シェフの陣頭指揮の下、
山菜料理をはじめ数々のご馳走がテー
ブルにあふれ、大いに盛り上がった。
今年も、イワナの骨酒、有井館心づく
しの手打ちそばは大好評であった。
二十三日は快晴。例年の夕方の碑前
祭とちがい、朝日を正面に浴び、すが
すがしいものであった。

記念山行は、車を連れ、開通したば

かりのクリスタルラインの山岳ドライ
ブ。残雪の富士山、ハヶ岳、南アの景
観を楽しみ、乙女高原に到着。有志は、
焼山峠から小檜山を往復後、本隊と合
流して再び大宴会。仕上げのヒヤムギ
は美味であった。秋の全国支部大会で
の再開を約して流れ解散となった。

参加者は飯寄忠邦以下六十名。

■第三十二回碑前懇親会実施要項
日時 五月二十七日(土) 十七時か
ら懇親会。二十八日朝、木暮碑

前祭、のち信州峠から横尾山
(一八一七・九メートル二等三
角点)に記念山行。

場所 山梨県北巨摩郡須玉町桂平 須
玉町営リーゼンヒュッテ(☎〇

五五・四四・五〇九一)

交通 JR中央線・韭崎駅下車、山梨
交通バス・増富ラジウム温泉行

き終点下車、徒歩一時間、タク
シーの便もあり

会費 一一、〇〇〇円(含一泊二食、
飲み物、記念品、山行交通費)

申込 〒400甲府市青沼三二二一四
(株)エンドー内 日本山岳会山梨

支部事務局 ☎〇五五二二三三
一〇六六六 FAX〇五五二一

二四一五二六五(なるべく文書
にてお申し込みください)

締切 五月一日 定員五十名

(山村正光)

自然保護随想

氷河が 魚を育てる

渡辺正臣

私はいま、西経三百度、北緯八四度
のモリスジュサップ岬の上空を西か
ら東に飛行している。

岬はグリーンランドの最北端に当た
り、北極海に面して標高約一四〇〇メ
ートルの、屹立した断崖が続いている
のだが、いまそこに凄まじい光景が展
開しているのである。

私は五十日ほど前に、ここを東から
西に飛び、氷に閉ざされて果てしなく
広がる真っ白な北極海と、そこからそ
そり立つ氷壁の大断崖を、食い入るよ
うに眺めていたのであるが、私の側に
きたスチュワードスBが「素晴らしい
景色でしょう。私の生まれた国です」
と、誇らしげに微笑んだのち、帰りは
何時かと問い、

「そのときは、もっと素晴らしい、凄
い景色が、貴方を守っていますよ」
と、にっこり笑って仕事に戻った。

それから五十日、北欧もなんとなく
春めいてきた。私の毎日も予定通り経
過した。帰路の搭乗手続きのため航空
会社に立ち寄ったところ、思いもかけ

ぬB嬢からのメモと一千万分の一地図
「北極海」が託されていた。

私はこんなときのためにと持参して
いた京扇子に、お礼のメモを託した。
私がここを発つ日にはアメリカにいる
とのこと。もう会うことはあるまい。

その夜は穴のあくほど地図を眺めた。
日本に帰る朝、私は高倍率の双眼鏡
を首に掛けタラップを駆けあがった。

空港はヨーロッパの朝らしく霞が懸
かっていた。岬の上空が気にかかる。

そのときスチュワードスBが側にき
て「グリーンランドは晴れ」の機長の
メモを渡してくれた。もう私のことが
分かっているのだ。

三時間半後のグリーンランドはよく
晴れていた。氷の海はあちこちが大き
く割れて海面も覗いていた。

待望のモリスジュサップ岬が窓下
に見えてきた。このときのために買っ
た双眼鏡だ。早速目にして驚いた。

溶けた氷海に、氷壁の表面が崩れ落
ち、中には海に突き刺さって塔のよう
になっているものもあった。

そのとき、耳元でHが「これでサカ
ナがよく育ちます」と呟いた。氷河が
魚の餌を大陸から大漁場の北極海に運
んでくれるのだという。

日本にもある。「森を育てサカナを
増やす」と。自然を大切にしよう。

書籍・雑誌 受入報告 1994年2月

著 者	書 名/雑誌名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
深田久弥他・編	上高地	268 pp/22 cm	修道社	1958	和久井正明氏寄贈
福島泰樹	愛しき山河よ (写真歌集)	174 pp/22 cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
牧野 昇他・監修	日本の創造力 NO.15 (貢献した外国人たち: 年表・索引)	525 pp/21 cm	日本放送協会	1994	組本社寄贈
山梨県 山岳連盟・編	勇攀高峰 アムネマチン未踏ルートに挑む ('93 年報告書)	103 pp/27 cm	山梨県山岳連盟	1994	発行者寄贈
松本政英他・編	カラコルム登山隊 '92 報告書: 八木沢和彦君追悼	87 pp/30 cm	東京電機大学 山岳部	1993	編者寄贈
大迫町立 山岳博物館・編	W. A. C. 関係所蔵図書総目次	23 pp/26 cm	大迫町立 山岳博物館	1994	発行者寄贈
本会青登懇会他・編	大学山岳部アンケート調査集計報告書 1993	51 pp/30 cm	日本山岳会	1994	発行者寄贈
Kunwar. Ramesh Raj	Fire of Himal	314 p/24 cm	Nirala P.	1989	著者寄贈
H.E.T.	The Himalayas : Ecology & Environment V2 (1992~1993)	108 p/28 cm	H.E.T.	1993	松田雄一氏寄贈

・会務報告

二月定例理事会

日時 二月十日(木) 十八時四十分～
二十一時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕藤平会長、嶋原、中村各副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、南川、松浦、伊藤、水野、南井、渡邊、溝口、中川、山本各理事、中島、川崎各監事、重廣常任評議員

〔委任〕片岡、堀井、大谷各理事、斎藤、湯浅、西村、宮下、神崎各常任評議員

◆議事

〔審議事項〕

一、JACマカルー登山隊一九九五年実行委員会の組織について

村井、小倉

藤平会長を委員長に実行委員会を設け、小委員会を解散。募金委員会、登山委員会を設け、九十周年事業として本年五月の総会に提案する。

承認

二、組織の見直しについて 中島監事 昨春秋に要請があり、会長の推薦を受け、小人数のプロジェクトチームで見直しに当たり、年度内に申請したい。

承認

三、故武田久吉元会長の写真掲載について

小倉

中山班一会員から下野新聞一一〇年記念誌「栃木県歴史人物事典」に写真借用と掲載許可の要請があった。承認

小倉

四、北海道トムラウシ登山の名義後援要請について

HAT-J・田部井淳子代表から一九九四年国際交流青少年環境体験登山(八月二十四～二十八日)の実施に当たり要請された。

承認

五、飯田市時又・ウエストン祭 小倉 JAC信濃支部を通じて要請があったが、ウエストンの顕彰と品位のあるものとして実施を要請する。

承認

六、平成六年度事業計画(案)について 小倉 各委員会で相違点を調べ、総務へ報告し、その上で三月の理事会に提出する。

承認

七、平成六年度予算(案)について 大倉 各委員会で検討、時勢に合わせて検討を要請する。

承認

八、廃棄図書について 水野 山に関連のない図書等は一定期間ル

承認

ムに供覧の上、廃棄する。

承認

九、青年部新委員の選任 村井 次の四会員の承認を要請する。

承認

石川貴上(Na.一二二六・東海大OB)

承認

藤江義夫(Na.一二二三・立正大OB)

承認

大川邦治(Na.一二五四・明治大OB)

承認

渡部朋幸(Na.一二六四・慶応大OB)

承認

●報告事項

承認

一、「秩父宮記念学術賞」について

小倉

二月三日、本会推薦の「自然エネルギー」は見送られた。なお受賞は「ヒマラヤの隠花植物」(日本植物分類学会)に決定された。

二、二月五日、日本勤労者山岳連盟の定期総会に祝電を送った。

●委員会報告

●資料委員会 二月一日、河口湖美術館特別展セレモニーに一名出席。当会の絵画寄託先でもある同館の特別展(全国美術館の名作一点ずつ展示)の案内を受けたので、これに対応した。

●集會委員会 四月十日(日)、新入会員のための「サクラハイク」を高川山で行う。五月二十八、二十九日若葉会山行(八甲田山、戸来山)を青森支部設立記念登山・青森ウエストン祭と合同で行う。

●自然保護専門委員会 山の自然保護指導者、活動家を養成するために「山」の自然学現地講座」は順調に進展している。昨年十月から一月までに三回(毎回約七十名)実施。新年から受講料(一回二、〇〇〇円)を徴収する。地球環境基金の助成は再び申請したい。

●図書委員会 三月二十五日に第二十

承認

五回「山岳図書を語る夕」を開催する。講師は『地図を使った風景スケッチ入門』の著者・山口祐一会員を予定している。

◆新入会員承認 池田勉他十一名、復活一名。

承認

●ルーム日誌

(2月)

1日 図書委員会

承認

2日 青年部 自然保護専門委員会

承認

5日 マカルー小委員会

承認

7日 連絡委員会 図書管理委員会

承認

8日 二火会 山研委員会 アルパイン・スケッチクラブ

承認

9日 フォトビデオクラブ

承認

10日 常任評議委員会 常務理事会

承認

14日 アルパイン・スキークラブ

承認

15日 海外委員会 フィルムビデオ委員会

承認

16日 三水会

承認

17日 科学委員会

承認

18日 青年登山懇談会

承認

21日 総務委員会

承認

22日 自然保護委員会

承認

24日 学生部

承認

25日 図書委員会

承認

28日 集會委員会

承認

2月来室者37名

INFORMATION



◆「若葉会山行」

参加申し込みのお知らせ

集会委員会

今年の集会恒例「若葉会山行」は、青森ウエストン祭と支部設立記念山行にも参加し、新緑の八甲田・十和田湖周辺の山と温泉を楽しむ計画です。

日程 五月二十七日(金) 東京発

二十八日(土) 朝食の後八甲田ロー

プウェイ移動 田茂やち岳出発

赤倉山山頂へ八甲田大岳山頂

仙人岱へ酸ヶ湯温泉下山後新

郷村・戸来へ移動 青森ウエス

トン祭 新郷温泉宿泊(寝袋持

参のこと)

二十九日(日) 戸来山往復(約四時

間(登山口周辺ミズバショウ観

賞、山菜勉強会のコースもある)

下山後帰京 午後九時頃東京に

て解散予定

集合 新宿駅西口スバルビル午後九時

会費 二七、〇〇〇円(現地参加一三、

申込 〇〇〇円) 含写真代、保険料
申込金一五、〇〇〇円(バス利
用)、現地参加は五、〇〇〇円
を左記の口座にお振り込みくだ
さい。振り込み確認後正式申し
込みとし、計画書を送ります。

(満員になり次第締め切り)

振込先 さくら銀行 新宿御苑前支店

普 840-5486011

(株)日本山岳会 集会委員会

*注意事項 ①宿泊場所の都合上寝袋
を持参のこと。②直前のキャンセルは
申込金を返却できない場合があるので
ご了承ください。③解散時間は交通事
情により大幅に遅れる場合があります。

◆現地講演会

「自然エネルギー利用実用化の現状」

科学研究委員会

自然エネルギー利用の実用化の現状
を徳沢園(太陽光発電)で見学し、山
研資料室に関係展示品でのミニ水力
発電システム等の自然エネルギー利用
計画についての講演会を実施します。

日時 六月十八日(土)・十九日(日)

場所 上高地山岳研究所

講師 徳沢園・上條敏昭会員

神奈川大学・鳥居 亮会員

日程 十八日十二時三十分山研現地集
合。徳沢園往復後、講演および
懇親会。十九日早朝解散。上高
地散策、焼岳、徳本峠など各自

で山行を楽しんでください。
会費 約五、〇〇〇円(宿泊費・懇親
会費、交通費、昼食代等は別)

申込 葉書に氏名、会員番号、住所、
電話番号を明記の上、五月末日
までに日本山岳会事務局まで。
詳細案内書を送付します(定員
二十名、先着順)。

問合せ ☎〇三三三八八八四六七〇

担当の森まで。

◆第十四回日本登山医学シンポジウム
医療委員会

期日 五月二十七日(金)・二十八日(土)

会場 日本エアロビクスセンター

千葉県長生郡長柄町上野五二一

一四 ☎〇四五七六五三三三

三三三

演題 中高年者や慢性疾患患者と高所

登山

*招待講演、特別講演もあります。

■会員異動 1/2月

▼物故 松澤亨(四七八六) 4・8・

8 内田耕作(一九五〇) 5・12・28

村岡昭三(三九八〇) 6・1・11 関

根吉郎(一四六九) 6・1・25 手塚

晴雄(八二八八) 6・1・14 甲能豊

三郎(八七八一) 6・1・29 日野悦

郎(一一〇九六) 6・2・3 山下朋

美(九五一一七) 6・2・12 花田澄人

(七一一二) 6・1・5

◆編集後記◆

二月号でお知らせした、会報「山」
の編集についての懇談会を三月十一日
ルームで開催しました。編集委員を含
めて十名が出席、今後のすすめ方など
について話し合いました。

「読みやすくなった」というのが大方
の意見でしたが、「必ずしもよく読ま
れているとは言えない」「写真をふや
す、スケッチもよい」「貴重な紙面の
スペースなので、『報告欄』の参加者
氏名の羅列はやめては」「いつも同じ
人の投稿が多いのでは」などの提言が
ありました。これらのご意見を参考に
して、よりよい会報の編集を目指した
と思います。いっそうのご支援を。

なお、新年度から二十ページだてを
年八回(従来は六回)に増ページする
こととし、予算も増やしていただきま
したので、ご期待ください。(T・I)

日本山岳会会報 山 587号

1994年(平成6年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京(03) 3261-4433

振替口座 東京 3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 技報堂